

氏名（本籍）	うー ちんふん 吳 青峰（中国）
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲第 121 号
学位授与年月日	平成 28 年 3 月 23 日
学位授与の要件	広島市立大学大学院学則第 36 条第 2 項及び学位規程第 3 条第 2 項の規定による
学位論文題目	立体造形の素材としての和紙の可能性
論文審査委員	主 査 教授 伊 東 敏 光 副 査 准教授 城 市 真理子 副 査 教授 関 村 誠

## 論文内容の要旨

紙は中国で発祥し、文化や情報の伝達媒体として次第に世界の各地域に広がった。日本に伝わった紙は、職人たちの改良によって和紙として誕生した。和紙は、パルプを原料にした洋紙(一般の紙)と区別するために和紙と呼ばれている。本来は日本で漉かれた手漉き和紙のことをいうが、現在は機械漉きの和紙も含まれている。古来より、紙は書写や情報伝達の媒体として人類に使われていたが、東洋の紙は書写以外にも宗教や日常の中にも使われている点で西洋のそれと異なる。したがって、東洋の紙である和紙は宗教や日常の中で形を変え、様々な造形物に変身し、様々な機能を発揮することが古来の洋紙との違いであり、世界に称賛される和紙の特徴でもある。

長い歴史の変遷で、和紙を素材にした立体造形物は信仰や供養から始まり、生活必需品にまで発展したが、20 世紀のイサム・ノグチの新しい解釈によって、和紙は現代彫刻の領域に展開させた。その後、和紙を用いた作家が相次いで登場し、現在も増えつつある。

伝統彫刻の視点から見れば、和紙の薄さ、軽さと、彫刻の奥行、重量感は全く逆の性質を持っているように思われるが、鎌倉時代からの伝統彫刻の中には、和紙と深い関係を持つ遺例はいくつか存在している。それは、和紙の物理的な性質を越えた信仰対象としての像である。このように、現代彫刻領域にとって比較的新しい素材と言われている和紙は、鎌倉時代にすでに信仰対象像の素材として使われていると考えられる。

本研究は、和紙の歴史をたどり、その時代における和紙の性質、特徴と伝統工芸や伝統美術との関係などを考察し、現代美術における和紙の性質、特徴、意味を考察することによって、和紙が現代彫刻に展開した理由、および伝統工芸や伝統美術と現代美術が和紙を通じてどのような繋がりを持っているかを明らかにし、和紙の立体造形の素材としての可能性を提示することを目的としている。

第一章では、和紙の歴史をたどり、和紙の発生、発展及び性質に関して概観した。和紙は最初貴族階級に独占され、高級品として一部の人間にしか扱われていなかったが、時代が降るにつれ、武士階級、庶民階級の順に普及した。この時代変遷の中で、和紙はその消費者の要望に応じて製造技術や加工技術、役割が変化し続け、多彩な和紙と多種の立体造形が生まれた。和紙のこのような歴史的な変遷がその諸性質である①軽さと強靱な性質、②吸収性、③透過性、④記憶性、⑤接着しやすい性質、⑥塑像性、⑦保存性に繋がっていることを証明した。

第二章では、伝統の紙製立体造形物を分析し、立体造形と和紙の関係を述べ、和紙の彫刻の素材としての可能性を間接的に証明した。本章では伝統の紙製立体造形物を、信仰や供養のための造形物と、日常生活の中の造形物とに分けて論じた。前者は和紙というより特集な意味を持つ経典や消息などを用いた造形物であり、後者は一般の和紙を用いた造形物である。これらの造形物を分析することで伝統紙製立体造形物の素材としての和紙の性質と用途を明らかにし、彫刻に応用できる可能性を秘めていることを証明した。

第三章では、美術領域での紙製立体造形物を分析し、和紙の彫刻素材として利用され、発展しつつある現状を述べ、和紙の彫刻の素材として展開した理由と発展の傾向を明らかにした。本章ではイサム・ノグチ、北山善夫、高田洋一、堀木エリ子などの作家の作品を分析し、現代の作家にとって和紙の意味や、その作品と和紙の性質との関係を明らかにした。イサム・ノグチは日本伝統工芸を新たに解釈することによって和紙を彫刻領域に取り入れ、和紙を素材にした彫刻の可能性を開いた。その後、和紙を用いた作家は相次ぎ現れた。その作品を大きく分けると表現を前提にした造形物と和紙の性質を前提にした造形物と分けられる。北山善夫、高田洋一は表現を前提に和紙の性質を利用し立体造形を作った。一方、堀木エリ子は和紙という素材を前提に利用しインテリアなどを作り、立体漉きや大判の和紙の製造技術を開発した。

結論では、和紙の歴史と紙製立体造形物の歴史及び現代美術での応用を概観し、これらの造形物の共同性と相違性を探り、和紙製立体造形物の将来性を見出した。今までの立体造形物は造形の目的によって、表現のための和紙と和紙による表現と分けられる。前者は精神や表現を前提に和紙による造形で、後者は和紙の性質を前提に表現することである。この二種の造形はお互いに影響しあって、和紙の持つ意味や和紙の造形技術を進化させ、新たな可能性を導き出すと思う。しかし、製紙技術の発展によって和紙の性質を持つ洋紙が開発され、洋紙の原料で作られた和紙も存在し、和紙と洋紙の境界が曖昧になっていることも事実である。したがって、和紙は日本文化の象徴として発展し、精神性を前提にした造形物は物質性を前提にした造形物より大きな可能性が秘めていると思う。

## 論文審査の結果の要旨

吳青峰提出の論文「立体造形の素材としての和紙の可能性」は、三章で構成されており、第一章で和紙文化の起源・歴史・製法をまとめ、第二章では、日本中世から近代までの紙製立体造形物について、宗教的なものや生活用具・玩具を例示し、それらが紙のどのような機能や性質を利用しているのか考察した。第三章では、現代作家による彫刻作品（立体的な造形作品）に関する考察へと発展させ、4人の作家が、和紙のどのような特質を利用して現代芸術の作品に転換させたものであるかを考察し、立体的な造形の素材として和紙の美術的効果を論じた。特に、イサム・ノグチの一連の作品「あかり」は、提灯に発想を得ながら民芸とは異なる美術的な造形を呈示し、和紙が「彫刻」作品の素材として本格的に認知される契機であったことを指摘した。また、北山善夫や高田洋一の作品が新たな造形表現を追求するなかで、凧や障子など和紙の造形に通じる立体作品を創作したという点で、イサム・ノグチの「あかり」の系譜に連なることを考察している。また、堀木エリ子は特殊な和紙を開発して建築空間に応用しており、和紙の立体造形が多様であることを示唆した。以上のように、本論文は和紙による様々な立体造形の歴史と現代作家たちの作品を、美術史に関連づけて体系的に捉えることを試みた、独創的で優れた研究論文であり、高く評価できる。